

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

力まずに しかし着実に（宮城ボランティア）

8月3日から5日間にわたり、日教組独自ボランティア活動に山梨の仲間3人と参加した。活動内容は、石巻市内の小学校でニーズに応じた教育支援活動であった。私たちの活動は、石巻市立開北小学校と中里小学校で開設されているプールでの子どもたちの監視及び指導活動と、避難所として使われていた中里小図書室を2学期にむけて整理する作業を行った。

私たちが当初作業を行った中里小、開北小周辺は、若干の被災状況がうかがえるものの、外観上はほぼ日常の生活に戻っているように見受けられた。しかし、一歩海岸線に近付くと光景は一変した。特に2日目に車窓から見た奥松島や、最終日に訪れた南三陸町、女川町、石巻市の海岸線の状況は、テレビの画面を介して見慣れているはずであったが、初めて目の当たりにする光景は筆舌に尽くしがたいものがあった。3月11日まで、確かにそこにあったはずの建物、街、人々の生活、思い出・・・すべてのものが津波とともになくなっていた。5ヶ月経過した後も、その状況は変わっていなかった。自然を前にして、自分たちは何とちっぽけな存在で、何と無力なのか。虚無感、無力感、無常感、徒労感・・・様々な思いが交錯した。

しかしそのような中であって、子どもたちをはじめとする被災地の方々は、力強く新たな生活にむかって歩みをすすめていた。ボランティアで接する子どもたちや先生方、地域の方々は、おそらく様々な経験を経てそれぞれの思いを持ちながら生活をしているのだと思うが、私たちが思う以上に力強く確実に歩みをすすめてようとしていた。どこから来たのかわからない私たちに対し、「ありがとうございます。」「ご苦労様です。」「どちらから来て下さったの。」「などと笑顔で声かけをしてくださり、遠慮しながらも震災について聞く私たちに「是非この状況を伝えて下さい。」「負けてられないから。」など話された。「支援をする」などとやや思い上がった気持ちで参加した私は、逆に人間の力強さや温もり、つながることや前向きに生きることの大切さなどを教えられたような気がした。

被災地の復旧・復興はこれから途方もなく長い時間と多くの支援を必要としている。私たちが携わった数日間の、しかもその中のたった数時間が多くの助けになっているとは決して思わない。しかし、その小さな歩みの継続と積み重ねが、乗り越えることが困難に思えるこの状況を乗り越える道に繋がっていると信じている。

私たちは、今回日教組が組織した教育支援活動をはじめとして、時間とともに経過していく状況を踏まえながら、今後、私たちにできる様々な支援の方法やあり方について知恵を出し合って探るとともに、自分たちの意識を常に保ちながら、息の長い支援を行っていくことが必要であると感じた。私も、3日目の



夜行われたミーティングで参加した仲間の口から語られた数々の言葉「人として」「教職員として」「学校で」、これらの言葉を反芻しながら、今後も向き合っていきたい。

最後に、5日間という短い期間であったが、貴重で有意義な時間を過ごさせていただけたことに対し、寝食を共にした日教組に集う16人の仲間たちと、微に入り細に入り私どものバックアップをして下さった日教組の役員・書記の皆さん方に感謝したい。

